

はじめに

令和3年1月中央教育審議会の答申において「令和の日本型学校教育」の姿として、「すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」が示されました。そして、この実現のためには、新学習指導要領の着実な実施が重要であり、ICT 活用や少人数によるきめ細かな指導体制の整備による「個別最適な学び」と、これまでも重視されてきた「協働的な学び」を一体的に充実させることが求められています。

さて、本校は、令和2年度、富田林市教育委員会から研究校の委嘱を賜り、国語科を中心とした「小金色の深い学びをめざして」を研究主題として取組みを進めることになりました。

まず、令和2年度は、「言葉の感覚を養う」ところから始めました。文章の叙述を大切にし、登場人物の気持ちを丁寧に読み取ること、友達の意見を自分の考えに生かすことをめざしました。しかし、令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、3カ月ほどの学校休校があり、また、新しい生活様式での学校教育活動などで、子どもたちの話し合いが十分にできず、研究も思うように進めることができませんでした。このような環境の中で、子どもたちにどのように力をつけていけばよいのか不安でしたが、今、できることをやっいてこうと取組みを進めました。

令和3年度は、令和2年度の活動から得た言葉を授業の中で子どもたちが使う場面を確実に設定していくことに力を入れました。子どもたちが言葉の感覚を養い、学び合いで考えを広げ、深めること、そして、授業の終わりにはふり返りをすることによって、学びの成果を実感することをめざしました。まだまだ感染症対策を強化しなければならない時ではありましたが、教職員一同、様々な工夫を出し合い、ICT 機器の活用等、本校ならではの子どもたちの交流を行わせたことで、さらに考えを広げていこうとする子どもたちの姿が見られ、学び合いの質が高まってきたことを感じることができました。

そして、3年間の校内研究をいったん総括していく令和4年度。今年度は、これまでの「学び合い活動」「ふり返り」の質の向上、「小金色の深い学び」を意識した授業づくりをめざし、取り組んでいます。これらの取組みは、まさに「令和の日本型学校教育」としての姿である「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけた授業改善に十分つながるものであると考えています。

本日(令和4年 12月1日)、多くの方のお力添えをいただきながら、各学年の授業とともに、この3年間の研究のあゆみをご報告させていただきます。ぜひ、忌憚のないご意見、ご感想をお聞かせいただき、今後の本校取組みのさらなる向上を図りたいと考えます。よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本研究に対しましてご指導ご助言をいただきました富田林市教育委員会をはじめ、大阪大谷大学教授 今宮信吾 先生、さらに、富田林市内小学校の先生方、日ごろより子どもたちを支えていただいている地域の皆様方に対しまして、厚くお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

校長 浅井 美佐